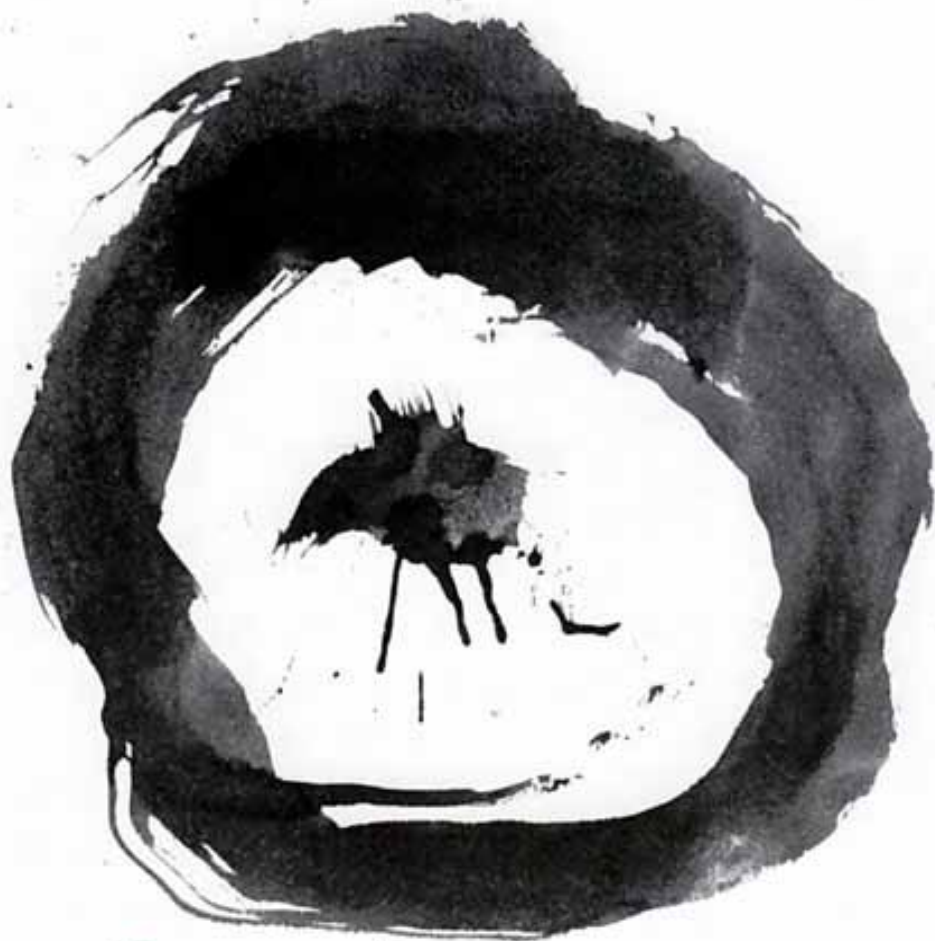


令和二年十一月一日発行 第三十巻第十一号 通巻第三五三号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

岡井省二創刊

令和2年11月号



# 秋天

高橋将夫

集められ忘れ去られし櫟の実  
辛抱の足らぬ雀は蛤に  
冷やかに告げし一言負けました  
胸の火をそつと扇ぐや秋団扇  
星流る愛が憎悪に変はるとき  
夢一夜たたんで仕舞ふ秋扇  
S 極に引き寄せらるる黒揚羽  
虫の音のぴたりと止みし殺気かな  
秋日傘お疲れさまと畳みけり  
水に生れ陸に育ちて秋天へ  
秋天に鳥が迷つてをりにけり

# 槐安集

加藤みき

達筆に見とれ残暑を忘れをり  
団扇風裏に返せば風新た  
夏の昼影に隙間の生れゐて  
髪洗ふユル・プリンナーに思ひ馳せ  
かなかなの終りのこゑの長くあり

中島陽華

よろばふや英彦山の姫しやら匂ひけり  
てのごいは藍の三柵屋鮎解禁  
虎の尾と大三郎のとろろ汁  
お多福が輝く三味線よ縞いさき  
夕映えの樹皮も八坂の花槐

近藤喜子

明日樟よりも今この刻を花木權  
すすき野や光さらさら鳴つてをり  
浸す手に空ひんやりと秋の水  
かげろふの翅すきとほるガラスかな  
人臭き闇を去りゆく精霊舟

瀬川公馨

荒梅雨やもて来し泥の新天地  
雪笹の不撓不屈を見たりけり  
走る走るちよつと細身の百足虫かな  
一滴流星群の刹那かな  
声明や夏水仙の蠱惑的

竹内悦子

白瓜の漬物貫ふ蛸薬師  
炎天の京の幽霊飴下げて  
洗濯物の日の香畳むや日雷  
朝顔や男の気配ありにける  
初盆の線香の黄のけむりかな

雨村敏子

膝ぼんがぐらぐら笑ふ暑さかな  
八月へ八月へ寄す火の記憶  
鬼灯の百の灯るは百の塊  
月涼し原爆ドームのその上に  
一身を横たふその上に友の川

柳川晋

アルコール消毒されて風の色  
義経を匿す人民村芝居  
風鈴に加油ジャコと書いてありにける  
蜷局とぐろ巻く貝の育てし恋螢  
遠浅の波を肴に月見豆

熊川暁子

雲の峰だれも通らぬ道を行く  
流星やどこかが音もなく凹む  
浮きもせず沈みもせずただ金魚  
まぶしさは淋しさに似て萩の白  
残暑なほ柔やわきもの胃に角ばつて



江島照美

積年の憂ひ飛び出せ心太  
から自信の満々なるよ生身魂  
恨みなどなかつたやうに墓参  
母の背をやさしく流し墓洗ふ  
歲月は客観を変ふ衣被

岩下芳子

城下に真清水湧きて魚の影  
かなかなの輪唱つづく夕べかな  
出来秋の色に染まりし風の中  
次亜塩素酸ソーダ滅菌水の秋  
猫の眼をどこを見てゐる原爆忌

寺田すず江

沈黙の海へ逃げゆくうろこ雲  
何も無い夜が来てゐる穴惑ひ  
暮れ残る空に晩夏の詩情あり  
無花果の季を忘れず歌ひ出す  
しみじみと水に味ある初秋かな

有松洋子

サーファアの白き足裏や秋の浜  
スーパアのレジの無言や秋暑し  
銭湯で一ト節うなる音頭取  
今宵みな星の薫りの挟かな  
秋遍路風が撫でゆくふくらはぎ

田中信行

短夜や孫の写真と猫自慢  
父の人生<sup>た</sup>び<sup>び</sup>辿る鉄路や青芒  
空蟬に生きた証の重さかな  
すれ違ふゲランの香り白日傘  
浜風やボサノヴァ似合ふ夏帽子

近藤紀子

鳳仙花わたしもはじめてみたいわよ  
梅雨寒や子のおきゆきし紅を手に  
夕化粧の香がして家が近くなり  
秋茄子をむく手もとより暮れにけり  
乱心か夢かひとこえ真夜の蟬

岩月優美子

秋蟬の鳴く鳴くラストスパートよ  
人去りし後の虚無感カンナ燃ゆ  
良き事も悪しきも丸め木槿散る  
がちやがちやこは日本ど真ん中  
秋入日すたとんと落ちしあとの海

竹中一花

秋めくや神の山へとバスの行く  
山風や山女魚づくしの夕日の間  
楊梅の匂ひを拾ふ竹の籠  
若狭彦霧の丹波の山越ゆる  
秋兆す $\Sigma$ の星のまはりから

前田美穂子

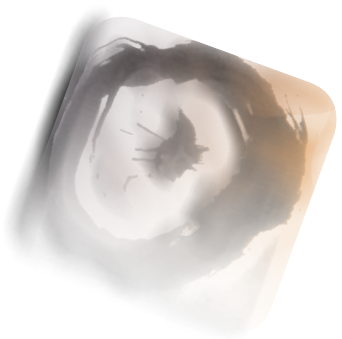
三国志繙みてをる夜長かな  
瓜の馬山懐に憩ひけり  
新米のにはひ倉庫に満ちみちて  
野猪いのししや冊を繕ふ老夫婦  
目交の踏切閉まるやませかな

吉田順子

真つ青な海の生みつぐ秋の雲  
秋蝶の黄を強くせり墓の間  
魂しづか秋の七草そろひたる  
静かなる音のしてをり松手入  
刻々と雲の怪奇や秋夕焼

中田禎子

秋暑し丑三つ時のシャワーかな  
はれやかな鏡の顔や雨後の月  
新涼や仕舞うガラスのネックレス  
八月の赤きルージュとマニキュアと  
カリヨンや尖塔の雲涼新た



# 槐市集

阿部さちよ

少年の狙ひ定まる蟬しづか  
古遊具廃棄袋へ埋むる夏  
過去一塊捨てたる夜半の梅雨の雷  
疫病禍古里遠き盆休み  
夕焼や背伸びして見し紙芝居

井上静子

秋澄めるソプラノのよく伸びてをり  
カサブランカ人間の声聞いてをる  
臍曲りとは誰のことかや敬老日  
ねんごろに硯洗うてあたりけり  
敬老日眼鏡二つを交互にす



出利葉孝

蠮螋や鎌振り上げてポーズとる  
鬼灯を含む音色やおてもやん  
断ち切れぬ思ひをそつとねぢれ花  
夏焦がすニューオリンズのジャズ絶叫  
土煙り叩き付けたる驟雨かな

今井充子

帯紙に鳥居描きし三輪索麵  
コロナ禍や短くなりし夏休み  
帰省待つ祖父母とテレビ電話かな  
平らかに古墳すれすれ夏燕  
令和の世スマホ動画の夏見舞

植木戴子

向日葵の花の数ほど笑顔かな  
蟬しぐれ空瓶干してをりにけり  
夏帽子湾処の濁り草のいろ  
鈴虫や天守に登る途中なる  
白紙に種の重さを収めけり

大塚たきよ

空は澄み暁の星瞬きぬ  
海に向かふバスより眺む芭蕉かな  
秋早浅瀬は細くなりける  
スカッシュや夢いつばいに傘寿来る  
夕日落つ中州のすすき揺れてをる

岡田桃子

雲手ゆんしやうや北風から南風雷去りぬ  
中尊寺蓮は瓜実市女笠  
午後四時の散歩の杖の音極暑  
片蔭や追ひ越しざまの一言よ  
投降のごとき落果や八月尽

荻布 貢

月に乞ふ七難八苦武士の意地  
银杏散る堀川通り大伽藍  
夜の街若者騒ぐましら酒  
ダイエツトするには悪しき豊の秋  
不知火や星占ひの運だめし

河添久子

天空にまかり出でたる雲の峰  
百日紅花も葉も落つる風の出で  
炎天下京都のロダン何思ふ  
静かに祈る平和アピール広島忌  
蟬時雨案内されし奥座敷

久保夢女

存分に部屋掻き回し金ぶんぶん  
釈迦釈迦と釈迦釈迦と聞く蟬の声  
裸子や前も後もあつけらかん  
熱帯夜悪鬼羅刹も寝不足に  
流れ星たれぞ願ひを叶へたり

槐 集

高橋将夫 選

大阪 出利葉 孝

守口 三木 亨

棒高跳び夏雲に飛び乗るとし  
睨めつこ餓鬼大将と青大将  
彷徨へるわだつみの声海月かな  
戦闘帽大地にポトリ終戦日  
運命に噛みつくごとし蟬しぐれ  
蚊柱は軍艦島を揺すぶりぬ  
祖谷溪は虫の闇また星の闇  
蚊帳にあつて蚊帳の外なる話かな  
安心の丸き世界や水すまし  
まいまいはたやすく雲に乗りにけり  
自粛する胸にひらくや大花火  
天の川はさむ二人の老年期  
情報じほうの真偽確かむ蝸牛  
空蟬の眼に残る異界かな  
ひまはりやプラス思考を信条に

大阪 藤田美耶子

枚方 高野 昌代

西瓜割り地球もろとも割る快感  
秋の蟬落つは避けたき石畳  
亡き母の声なき破願星今宵  
水底へ沈む早さの新豆腐  
吊革を掴まず秋が立つてゐる  
秋立つや木陰くる風命の声  
虫籠の虫の心をのぞきたし  
しみじみと時歌ひをり法師蟬  
胸こみあげる流燈の闇なりし  
身のおきどころなきしとき月を見む  
御金神社の吾に飛びくる黄金虫  
宿題はまだかまだかと法師蟬  
まつ新なノートに何を原爆忌  
初秋や深きに触れたき人の恋  
徒あなならぬコロナに仕掛ける蟻地獄

# 銀河往來 高橋将夫

運命に噛みつくごとし蟬しぐれ 出利葉 孝

七年間も地中に居て、蟬となつたらつた七日の命。その運命を思うと、蟬の激しい鳴き声に対する「噛みつくごとし」の比喩も腑に落ちるといふもの。

〈棒高跳び夏雲に飛び乗ることし〉は軽快な直喩の句。〈睨めつこ餓鬼大将と青大将〉の句では、腕白坊主と青大将が睨みあう景がユーモラスに描かれている。

〈戦闘帽大地にポトリ終戦日〉は大地に落ちた戦闘帽が実に印象的。

安心の丸き世界や水すまし 平野 多聞

水すましがスイスイと水面に描く水輪。その円相の中に居て、水すましはさぞ安らかな心境にあるのだろう。「丸き水輪」と即物的に記述しないで「丸き世界」と表現したことで一句の世界が広がった。

〈蚊柱は軍艦島を揺すぶりぬ〉の句は誇張が軍艦島の名称にマッチしており、〈祖谷溪は虫の闇また星の闇〉の句では「虫の闇」と「星の闇」の列記に注目したい。

自肅する胸にひらくや大花火 藤田美耶子

コロナ自肅で中止となった各地の花火大会。そんな折に花火師の粋な計らいで上げられたサブライズの花火。「胸にひらく」の措辞がまことに絶妙。

〈天の川はさむ二人の老年期〉の句、高齢の二人が天の川を

挟んでいるという景がなんともほほえましい。

西瓜割り地球もろとも割る快感 三木 亨

西瓜割りで見事に西瓜を割った時の快感は実はそのにあつたのか。痛快な一句。

〈吊革を掴まず秋が立つてゐる〉、コロナの感染を思うとおいそれと吊革も掴めない。秋が来たのに、まだそんな状況なのだ。

秋立つや木陰くる風命の声 柴田 靖子

木陰を来る秋風に命の声を聞く感性に共鳴。へしみじみと時歌心をり法師蟬からは法師蟬が鳴く晩夏の情景がしみじみと伝わってくる。

御金神杜の吾に飛びくる黄金虫 高野 昌代

地獄の沙汰も金次第というが、神々の世界も例外ではないのかもしれない。黄金虫飛んできて何か御利益が有る予感。

思ひ出を肴に酒と秋の空 中西 厚子

澄み渡った秋空の下では思い出もい酒の肴になるようだ。

喉元の言葉知りたる墓洗ふ 阿部さちよ

喉元まで出ていて言えなかった言葉。言わずとも分かっていたであろう故人。そんな故人への強い思いが伝わってくる。

早苗田やここしばらくは水天下 竹村 淳

代田から早苗田になり、やがては実り田に変わる。それまでは豊かな水が稲を育むのだ。